

# 「ピンクイ」の誕生

中 田 敏 夫

Toshio NAKADA

(国語教室)

## 1 はじめに

渡辺(1996)では日本語と韓国語の遠近をいくつかの事例とともに紹介しているが、「色」の世界についても興味深い指摘がある(21-29頁)。「色」が「色彩」と「色事」の両方の世界に展開する類似性に触れた後、色彩用語について色をあらわす名詞がそのまま形容詞として使われる英語などに対し、「日本語とハングルの色彩形容詞がきわめて少数にかぎられている」こと、「茶色」を別とし、色彩形容詞にふくまれる色の種類までもが、日・韓の両言語では瓜二つであることを述べている。

青—青い：パラン—パラッタ 赤—赤い：パルガン—パルガッタ 黄—黄色い：ノラン—ノラッタ  
白—白い：ハヤン—ハヤッタ 黒—黒い：カマン—カマッタ

上記5語が挙げられた色彩形容詞である。さらに興味深いのは、「みどり」や「むらさき」に対する「みどりい」、「むらさきい」のような形容詞形が存在しない点が「韓国語でも事情は全く同じ」との指摘である。

日韓両国語の色彩語の語彙システム上の類似性が何によるものかを求めるのはむずかしい。ここではその議論は置き、実は類似性の中にも現代日本語においては、少なくともある地域社会では、この語彙システムの基本を打ち破って新たな言語表現が生まれつつある状況を指摘したい。

愛知県生まれの子供と保育園の砂場で遊んでいた折り、ピンク色のショベルをさして「ピンクイの取って」と言うの耳にした。初めて聞く「ピンクイ」ということばに、偶発的に働かせたアナロジーの結果生まれた臨時的な造語であると考え、その創造性に感心するばかりであった。しかしその数ヵ月後、同じ砂場で1年以上の子供がほぼ同じ文脈で「ピンクイ」と発言したのに出会い、このことばが個人の造語にとどまらない広範な使用状況にある可能性を感じた。

本稿は、色彩形容詞化の可能性のある数語について実施したアンケート調査を踏まえ、愛知県においては青年層を中心に新たな色彩形容詞が誕生しつつある事

実を記述するものである。用法・機能の細かな使用状況、全国的な使用状況など、その全体像は今後の調査をまわって明らかにしていく予定である。

## 2 調査の概要

調査は、愛知県出身の大学生を中心にその両親などを含めて、色彩形容詞化の実態をみようとしたものである。

### ア) 調査項目

下記の項目について「使う」「使わない」を選択する形で回答を求めた。調査の手間との関係から活用形をそろえることはできなかった。

- ①黄色；この花はキーナイ。キーナイ花。この花はキーナカッタ。
- ②緑色；この花はミドリイ。ミドリイ花。この花はミドリカッタ。この花はミドリクになった。
- ③紫色；この花はムラサキイ。ムラサキイ花。この花はムラサキカッタ。
- ④ピンク；この花はピンクイ。ピンクイ花。この花はピンクカッタ。この花はピンククになった。
- ⑤オレンジ；この花はオレンジイ。オレンジイ花。この花はオレンジカッタ。この花はオレンジクになった。
- ⑥黄緑色；この花はキミドリイ。
- ⑦茶色；この花はチャチャイ。

なお、愛知県に古くから使用がみられるキーナイについては、新たな色彩形容詞化を論ずる今回の考察からは省く。「茶」に対するチャチャイは、事前にチャイではなくチャチャイの形なら使用するという情報を得ていたため、この形を採った。

### イ) 調査対象

青年層については愛知教育大学の学生を対象に、講義時間内に実施した。また壮年層・老年層については、学生が家へ持ち帰り両親等にも実施したものである。

分析対象となったのは次の通りである。

青年層；全体412名(女性267名, 男性145名。尾張173名, 名古屋91名, 三河148名。)

壮・高年層；全体200名(昭和20年以前生まれ83名,

昭和20年以後生まれ117名。〈大正以前42名・昭和1桁9名・10年代32名、20年代83名・30年代34名・40年代なし。〉女性117名、男性74名。尾張56名、名古屋48名、三河96名。)

地域性をみるため、小学校、中学校を同地域で卒業したもののみを資料とした。「名古屋」は名古屋市出身である。したがって「尾張」にはその数を含まない。壮高年層の「昭和20年」という境は、便宜的に戦前戦後という目安にしたがったものである。

ウ) 調査日時

1996年1月～3月。

なお、この調査の後、1996年6・7月に次の4点について、青年層に対し補充調査を行っている(全体215名。女性176名、男性39名。)。その結果も分析の過程で参考にする。

第1点;「この花はピンクイ」について、「聞いたこと」があるかどうか。「聞いたこと」のある場合、「いつ頃から」聞いたことがあるか、の確認。

a) 覚エテイナイ b) 子供ノ頃カラ c) 中学生 d) 高校生 e) 大学ニ入ッテカラ

第2点;「この花はピンクイ」について「使ったこと」があるかどうか。「使ったこと」のある場合、「いつ頃から」使っているかの確認。(選択肢は同上)

第3点;「ピンクイ」ということばの性格の捉え方の確認。次から当てはまるものを選ぶ(複数可)。

a) 標準語 b) 書きことばで使ってもいい  
c) 若者語 d) 流行語 e) 方言

第4点;どの年齢層が「ピンクイ」を使用しているかの判断。次から当てはまるものを選ぶ(複数可)。

a) 子供 b) 中学生 c) 高校生 d) 大学生  
e) 大人 f) おじいちゃん・おばあちゃん

### 3 調査結果

調査結果は表1(青年層)・表2(壮・高年層)の通りである。

#### 3.1 愛知県出身青年層

最初に、全体の概観を行う。図1青年層の結果より、形容詞化は6語均等に起こっているのではないことがまず指摘できる。終止形だけを取り出すと、次の通りである。

ピンクイ66.7%, ミドリイ29.6%, ムラサキイ17.0%  
キミドリイ15.5%, チャチャイ14.8%, オレンジイ6.6%

ピンクイが先駆け、それにミドリイ、さらにそれ以下が続くという形になっている。

男女別(図2)では、ほとんどの語において女性が上回っている。17語形の平均は、女性28.8%, 男性20.3%と、女性がかなり上回っている。形容詞化の現象を女性が引っ張っていることをうかがわせる。

地域別(図3)では、17語形平均で名古屋29.8%,

表1 愛知県出身青年層

	全体 412名 (%)	女性 267名 (%)	男性 145名 (%)	尾張 173名 (%)	名古屋 91名 (%)	三河 148名 (%)
1)ピンクイ(終)	275(66.7)	195(73.0)	80(55.2)	97(56.1)	66(72.5)	112(75.8)
ピンクイ(体)	281(68.2)	200(74.9)	81(55.9)	93(53.8)	69(75.8)	119(80.4)
ピンクカット	200(48.5)	154(57.7)	46(31.7)	72(41.6)	49(53.8)	79(53.4)
ピンクク	163(39.6)	125(46.8)	38(26.2)	56(32.4)	39(42.9)	68(45.9)
2)ミドリイ(終)	122(29.6)	87(32.6)	35(24.1)	43(24.9)	32(35.2)	47(31.8)
ミドリイ(体)	90(21.8)	62(23.2)	28(19.3)	31(17.9)	22(24.2)	37(25.0)
ミドリカット	78(18.9)	64(24.0)	14(9.7)	32(18.5)	19(20.9)	27(18.2)
ミドリク	80(19.4)	59(22.1)	21(14.5)	27(15.6)	25(27.5)	28(18.9)
3)ムラサキイ(終)	70(17.0)	46(17.2)	24(16.6)	28(16.2)	19(20.9)	23(15.5)
ムラサキイ(体)	52(12.6)	33(12.4)	19(13.1)	19(11.0)	15(16.5)	18(12.2)
ムラサキカット	95(23.1)	59(22.1)	36(24.8)	44(25.4)	24(26.4)	27(18.2)
4)キミドリイ(終)	64(15.5)	47(17.7)	17(11.7)	25(14.5)	18(19.8)	21(14.2)
5)チャチャイ(終)	61(14.8)	48(18.0)	13(9.0)	19(11.0)	11(12.1)	31(20.9)
6)オレンジイ(終)	27(6.6)	19(7.1)	8(5.5)	9(5.2)	8(8.8)	10(6.8)
オレンジイ(体)	26(6.3)	16(6.0)	10(6.9)	7(4.0)	8(8.8)	11(7.4)
オレンジカット	73(17.7)	55(20.6)	18(12.4)	30(17.3)	21(23.1)	22(14.9)
オレンジク	52(12.6)	39(14.6)	13(9.0)	20(11.6)	16(17.6)	16(10.8)
平均	(25.8)	(28.8)	(20.3)	(22.1)	(29.8)	(27.6)

「ピンクイ」の誕生

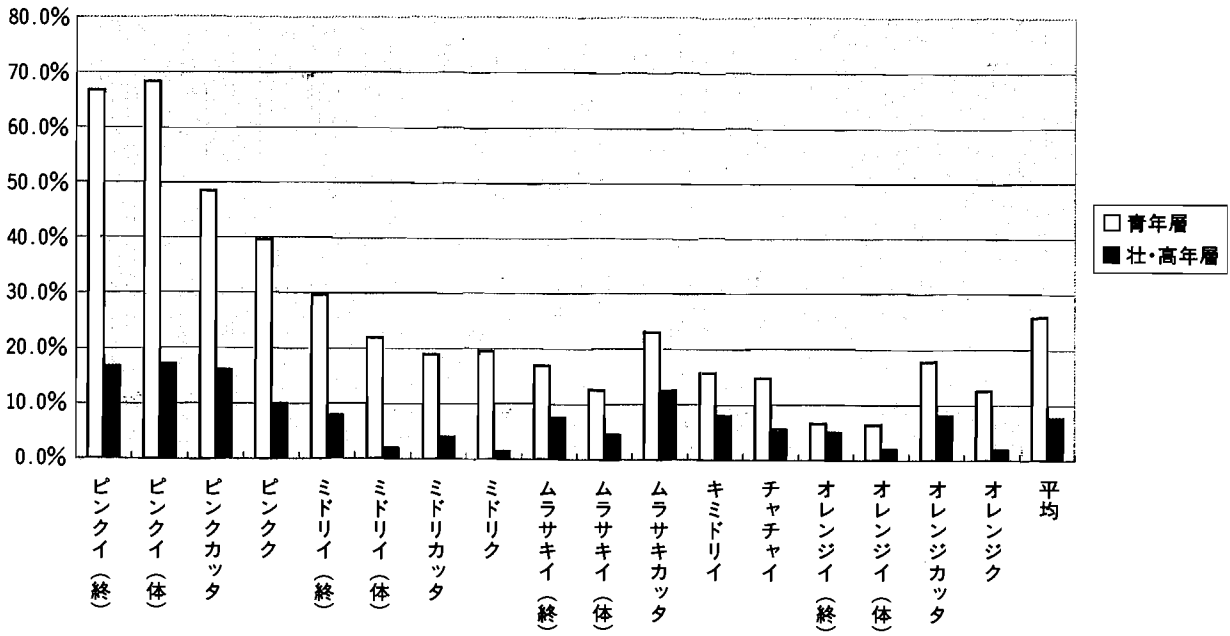


図1 愛知県年層別

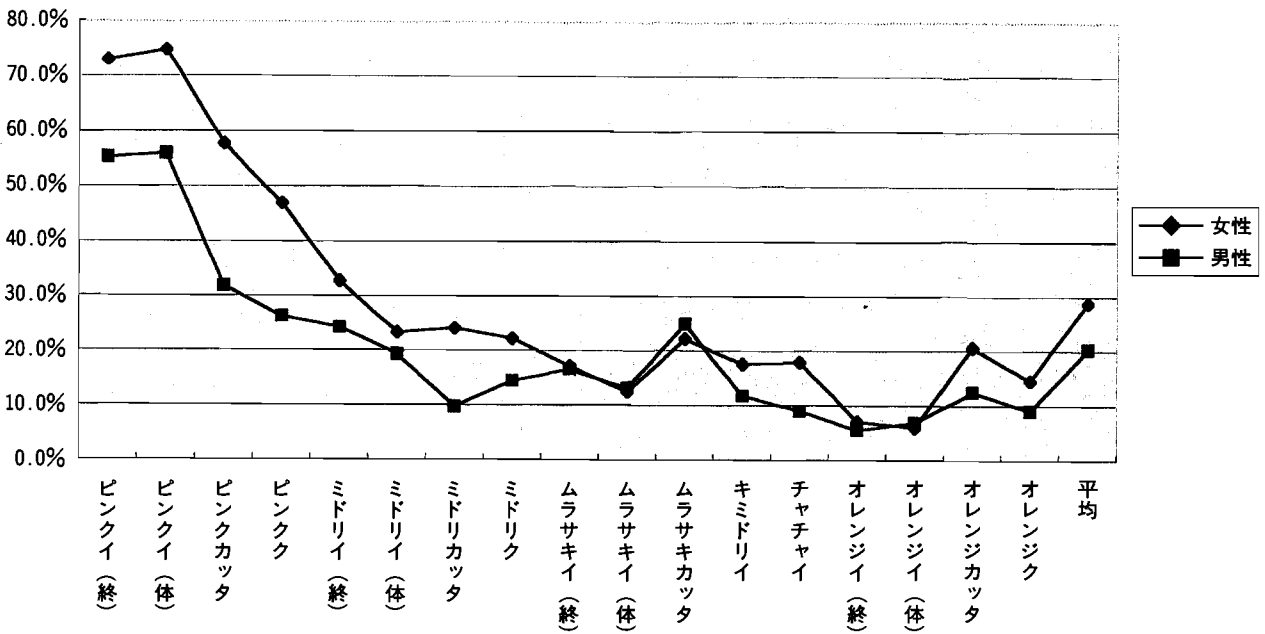


図2 愛知県青年層男女別

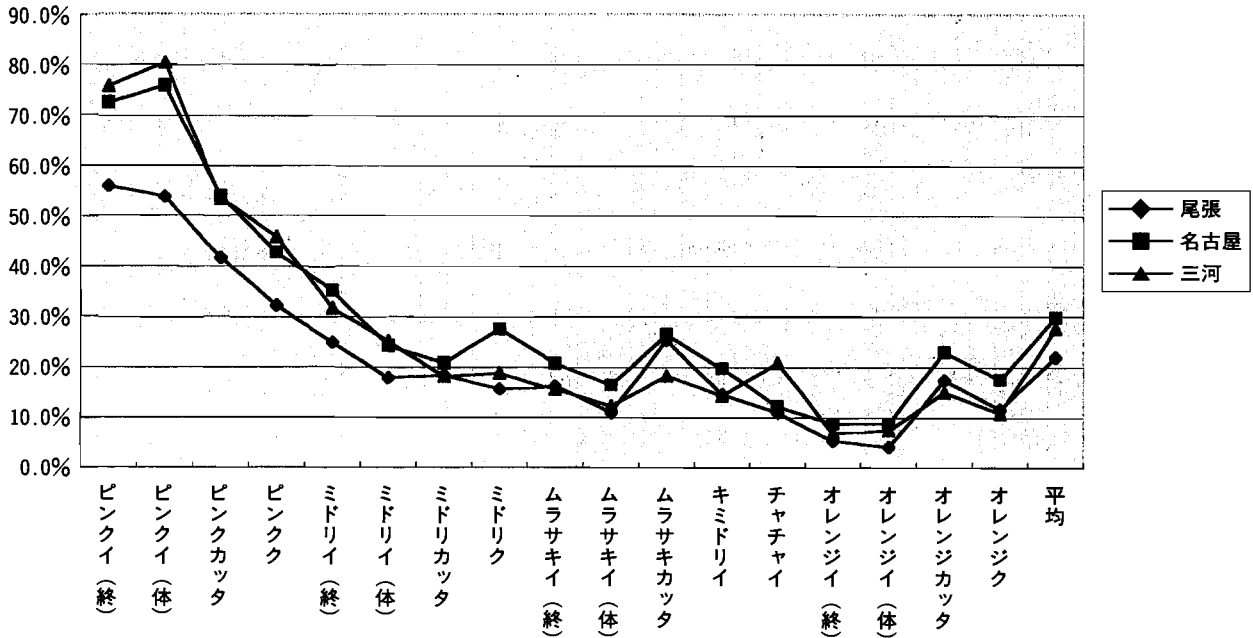


図3 愛知県青年層地域別

表2 愛知県出身壮・高年層

	全体 200名 (%)	20以前 83名 (%)	昭20以後 17名 (%)	女性 126名 (%)	男性 74名 (%)	尾張 56名 (%)	名古屋 48名 (%)	三河 96名 (%)
1)ピンクイ (終)	33(16.5)	5( 6.0)	28(23.9)	25(19.8)	8(10.8)	6(10.7)	7(14.6)	20(20.8)
ピンクイ (体)	34(17.0)	9(10.8)	25(21.4)	24(19.0)	10(13.5)	8(14.3)	7(14.6)	19(19.8)
ピンクカット	32(16.0)	8( 9.6)	24(20.5)	19(15.1)	13(17.6)	8(14.3)	5(10.4)	19(19.8)
ピンクク	20(10.0)	3( 3.6)	17(14.5)	14(11.1)	6( 8.1)	3( 5.4)	5(10.4)	2(12.5)
2)ミドリイ (終)	16( 8.0)	11(13.3)	5( 4.3)	8( 6.3)	8(10.8)	8(14.3)	3( 6.3)	5( 5.2)
ミドリイ (体)	4( 2.0)	1( 1.2)	3(2.63)	2(1.60)	2( 2.7)	2( 3.6)	0( 0.0)	2( 2.1)
ミドリカット	8( 4.0)	3( 3.6)	5( 4.3)	5( 4.0)	3( 4.1)	5( 8.9)	0( 0.0)	3( 3.1)
ミドリク	3( 1.5)	2( 2.4)	1( 0.9)	1( 0.8)	2( 2.7)	0( 0.0)	1( 2.1)	2( 2.1)
3)ムラサキイ (終)	15(7.5)	11(13.3)	4( 3.4)	7( 5.6)	8(10.8)	7(12.5)	3( 6.3)	5( 5.2)
ムラサキイ (体)	9( 4.5)	4( 4.8)	5( 4.3)	3( 2.4)	6( 8.1)	3( 5.4)	3( 6.3)	3( 3.1)
ムラサキカット	25(12.5)	9(10.8)	16(13.7)	16(12.7)	9(12.2)	9(16.1)	5(10.4)	11(11.5)
4)キミドリイ (終)	16( 8.0)	3( 3.6)	13(11.1)	7(5.6)	9(12.2)	9(16.1)	2( 4.2)	5( 5.2)
5)チャチャイ (終)	11( 5.5)	0( 0.0)	11( 9.4)	7( 5.6)	4( 5.4)	1( 1.8)	4( 8.3)	6( 6.3)
6)オレンジイ (終)	10( 5.0)	4( 4.8)	6( 5.1)	4( 3.2)	6( 8.1)	6(10.7)	2( 4.2)	2( 2.1)
オレンジイ (体)	4( 2.0)	2( 2.4)	2( 1.7)	1( 0.8)	3( 4.1)	2( 3.6)	0( 0.0)	2( 2.1)
オレンジカット	16(8.0)	5( 6.0)	11( 9.4)	9( 7.1)	7(9.5)	6(10.7)	3( 6.3)	7( 7.3)
オレンジク	4( 2.0)	1( 1.2)	3( 2.6)	3( 2.4)	1( 1.4)	2( 3.6)	1( 2.1)	1( 1.0)
平均	( 7.6)	( 5.7)	( 9.0)	( 7.3)	( 8.3)	( 8.9)	( 6.3)	( 7.6)

三河27.7%、尾張22.1%の順である。尾張の低さが若干目立つが、地域差といえるほどのものか、慎重に考える必要がある。

以下、語別にみる。

まず、ピンクイは、他の5語に比べ使用率が圧倒的に高い。ピンクイの形では、終止・連体ともに7割近い青年が使用している。「聞いたこと」のアリ・ナシを確認した補充調査では、実に91.2% (215名中196名)の青年が聞いたことアリ、と回答している。ピンクイの浸透度の大きさが理解できる。また、ピンクイの形だけでなく、ピンクカットの形(以下、タ形)・ピンククの形(以下、ク形)の活用形も他の語に比べ使用率が高く(各々48.5%、39.6%)、愛知県下青年層においてピンクイは活用形をそろえた1語の色彩形容詞として成立しつつあることが指摘できる。

なお、男女別ではいずれの活用形においても女性が20%ほど男性を上回っている。これは他の語ではみられない開きである。補充調査の「聞いたこと」アリ・ナシ(表3)でも、アリが女性が93.2% (176名中164名)、男性82.1% (39名中32名)となっており、女性への浸透がはっきりする。

また、地域別では、ピンクイの4形はほぼ三河、名古屋、尾張の順で使用率が低くなっている。4形の平均使用率をみると、三河63.9%、名古屋61.33%、尾張46.0%となる。これは、前述の17語形の平均使用率の順とは異なっており、ピンクイについては、その浸透度の高さを含め、他の語とは違った事情を勘案する必要がある。壮・高年層の結果とあわせ、後に考察する。

次に、ミドリイは終止形が30%近くあり、終止形が15%以下にとどまっている残り4語に比べ、一定の使用率が認められよう。補充調査の「聞いたこと」アリ・ナシでも、ミドリイはアリが54.0% (215名中116名)にのぼっている。連体形など他の3形も20%前後の使用率である点、男女差でも4形とも女性が男性を上回っている点、地域別でもほぼ名古屋、三河、尾張の順である点など、全体の動きと矛盾がなく、語の安定度を思わせ、形容詞化の二番手の位置にあるといえる。

一方、残り4語については、使用の状況に不安定さが目立つ。活用形別では、ムラサキイ・オレンジイはタ形が終止形を上回っており、終止形がかなり上回るピンクイ・ミドリイとは異なった様相を示す。男女別では、ムラサキイの連体形・タ形、オレンジイの連体形で男性が上回っており、全体の傾向と重ならない。地域別では、尾張が三河を上回るムラサキイの終止形・タ形などもみられ、ムラサキイ以下の語形では3地域に目立った差がみられない。また補充調査の「聞いたこと」アリ・ナシでも、アリは、キミドリイ25.1% (215名中54名)が最高であり、ピンクイ・ミドリイとは歴然とした差が認められる。

以上、ムラサキイ・キミドリイ・チャチャイ・オレ

ンジイの4語の形容詞化のばらつきは、これが新しく起こりつつある現象であることによると考えられる。個人差が激しい段階ともいえ、形容詞化の進展は今後の状況をまつ。

### 3.2 愛知県出身壮・高年層

全体をみると(図1)、どの語形も青年層に比べかなり低い使用率になっている。そんな中で、昭和20年をひとつの境にしてみたときには(図4)、昭和20年以後の方が全般的に使用率が高いことが指摘できる。男女別(図5)では青年層とは異なり、女性と男性は前後しながらほぼ同じ使用率で推移する。地域別でも17語の平均をとれば、青年層とは異なり、3地域の差は認められない。

さて、6語の終止形の結果は次の通りである。

ピンクイ16.5%、ミドリイ8.0%、ムラサキイ7.5%、キミドリイ8.0%、チャチャイ5.5%、オレンジイ5.0%

ピンクイの使用率は青年層に比べれば確かに低い。他の5語が8%以下という結果をみると、ピンクイとその他に質の違いを認めるべきであろう。他の活用形をみても、ピンクイは連体形17%、タ形16%、ク形10%と、満遍なく10%以上の使用率となっている。ただし、この結果は、図2の通り、昭和20年を境にみたとき、昭和20年以降の結果が大きな影響を与えていることが理解される。ピンクイでは、壮・高年層として一括すべきではないようである。各語の活用形の平均を昭和20年以前以後で整理すれば次の通りとなる。

ピンクイ(7.5%—20.1%)、ミドリイ(5.1%—3.0%)、ムラサキイ(9.6%—7.1%)、キミドリイ(3.6%—11.1%)、チャチャイ(0%—9.4%)、オレンジイ(3.6%—4.7%) (いずれも前者が昭和20年以前、後者が以後の結果である)

これより、昭和20年以後の世代のピンクイに限っては一定の使用の様相を認めるべきであろう。昭和20年以前では、ピンクイ4語形平均の7.5%はミドリイ以下の5語の結果と肩を並べる低さであり、この世代においては、ピンクイを含め、色彩形容詞の一定の使用は認めがたいといってよかろう。また、昭和20年以後の世代においても、ミドリイ以下の5語については、使用率がどの活用形も全般的に低い点、昭和20年以前の方がかえって以後の世代よりも数値の高い語形がみられる点などから、一定の使用と認めるのはむずかしいところである。

なお、地域別で、ピンクイは青年層と同様、尾張、名古屋、三河の順で使用率が高くなっている(4つの活用形平均各々11.2%、12.5%、18.2%)。青年層と壮・高年層で共通するこの結果については、生成のプロセスを考慮する上で一つの示唆を与えてくれるものと思われる。

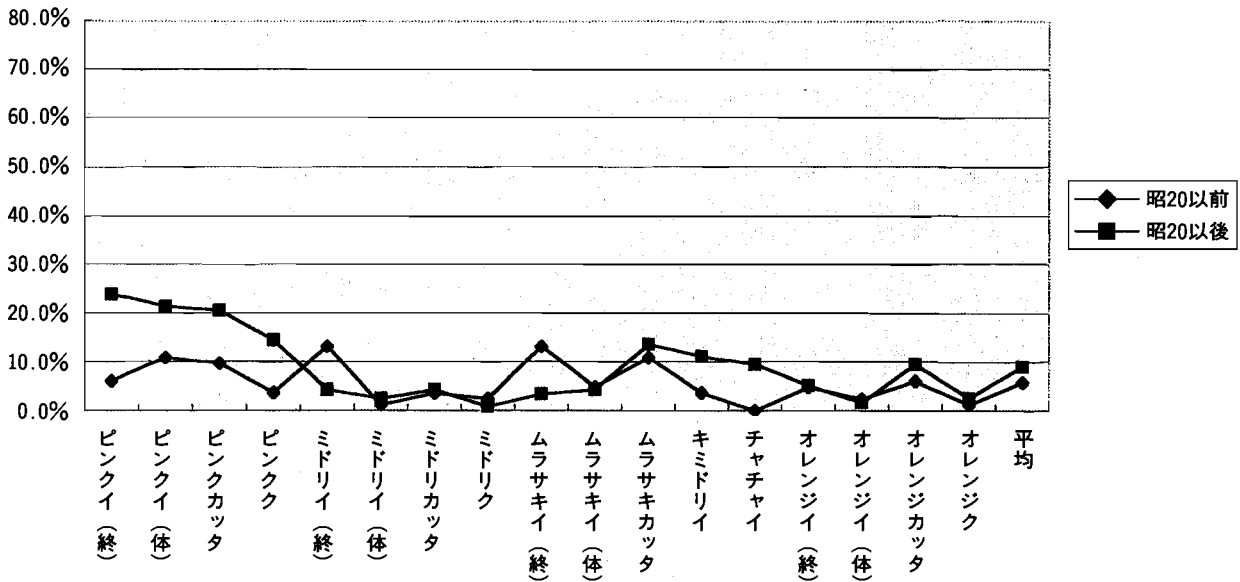


図4 愛知県社・高年層昭和20年以前以後別

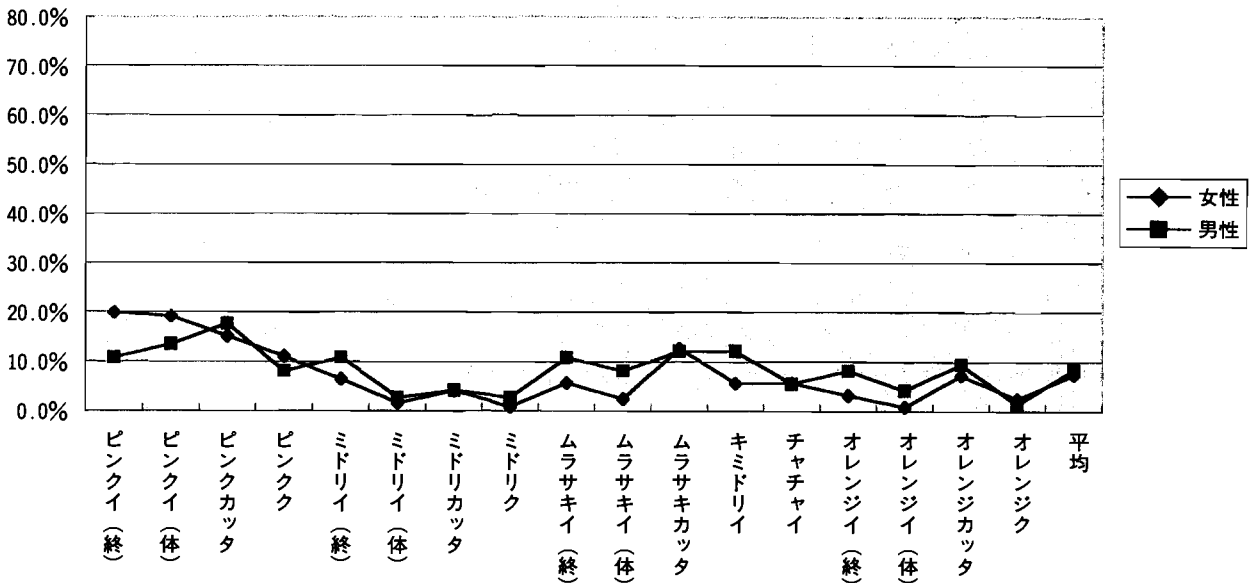


図5 愛知県社・高年層男女別

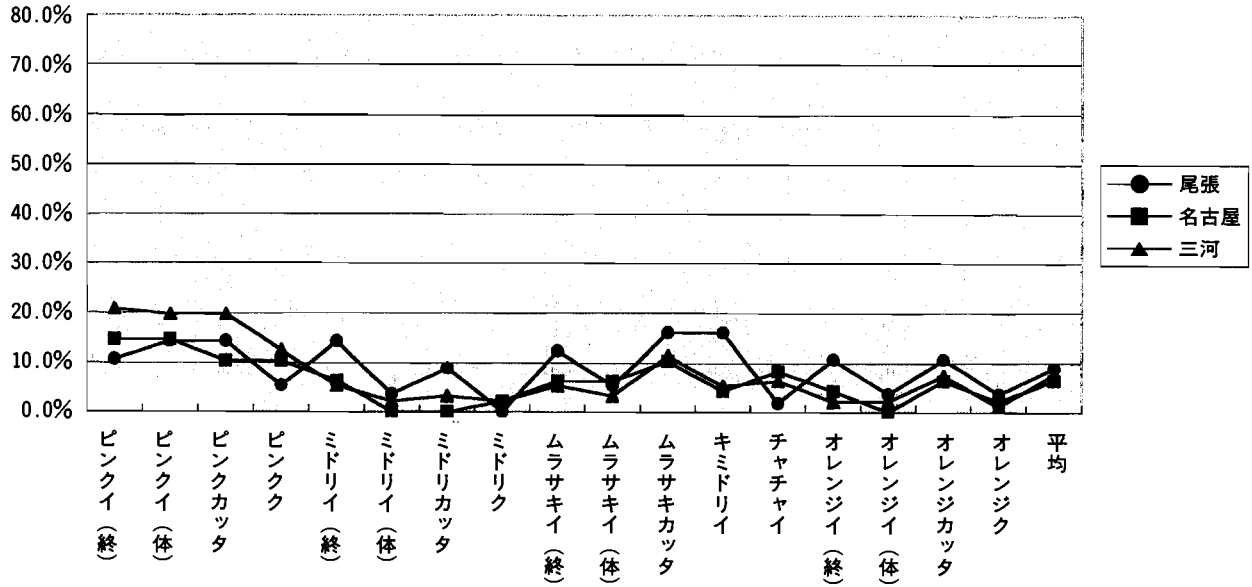


図6 愛知県壮・高年層地域別

## 4 考 察

### 4.1 ピンクイの誕生

ピンクイという語形はどのようなプロセスを経て誕生したと考えるべきか。

ここでピンクイの生成を考えると、少なくとも当地方では、色彩語の基本形「赤い・青い・白い・黒い」への analogy (「類推」) の作用を考慮するのが妥当であろう<sup>(註1)</sup>。しかし、「ピンク」から直接「赤い」などへの analogy を働かせた結果ピンクイが生まれたとは考えにくい。なぜなら、和語系の色彩語が豊富にあるなかで外来語のピンクがはじめにこの作用を起こす必然性が果たしてあったのだろうか。そもそも形容詞化は和語系の語を基底として基本的には成立する。ヨーロッパ系の外来語も存在しうが、非常に稀である。筆者の知る範囲では、ナウイ・エロイ・グロイ・エッチイなどの語が挙げられるぐらいである<sup>(註2)</sup>。いずれも俗語的ニュアンスを伴うものである。

吉川・山口 (1972) は愛知県豊橋地方の語彙集を掲載しているが、「色」の項に次のようにある。

ちやいろい (茶色の) はそんなにおかしくはないが、最近の幼児はももい (桃色の) という。「体言+い」の方法による形容詞化で、pinky のような感じである。(208頁)

この「ももい」という語の存在は非常に示唆的である。

ももいは次の analogy の結果生成された語であろう。

「もも」(桃) : x = 「あか」(赤) : 「あかい」(赤い)  
x = ももい

これが、「幼児語」のレベルでまず社会的に登場して

くるとすれば非常に納得のいくところである。ことばがまだ未熟な子供の偶発的に働かせた analogy の結果生まれた臨時的な造語であったレベルから、幼児の世界で共通にその存在が認知され、「幼児語」として社会的に位置付けられていったものである。ただし、1997年度の豊橋市内の幼稚園の教育実習に参加した学生の報告によれば、「ももぐみ」があり、その園児達は「モモイロイテープ」(桃色のテープ)、「モモイロイハコ」(桃色の箱)などと頻繁に使用していたとのことである。豊橋地方での幼児語として、吉川・山口にはモモイしか挙げられていないが、モモイロイの存在も可能性としてであろう。

さて、ピンクイの形成だが、このようなモモイあるいはモモイロイを媒介として、「モモ」あるいは「モモイロ」の部分外来語である「ピンク」に置き換えることによって、「ピンクイ」が自動的に生まれてくる可能性があるであろう。このことは同時に、ピンクを基底に「赤い・青い」などへの analogy の結果生成した形としての性格・位置を併せ持つことにもなる。それが、ミドリイ、ムラサキイ・オレンジイなどの新たな色彩形容詞をさらに誕生させていく契機となっていくのである。

モモイの報告は管見によれば吉川・山口 (1972) に限られる。吉川・山口は豊橋地方についての報告であり、その点で、今回のピンクイの結果が壮・高年層、青年層ともに尾張、名古屋に比べ三河が高いのは、モモイからピンクイの誕生が三河を中心に起こった可能性を示すともいえる。しかし、全県下での青年層のピンクイの使用の急激な高まりを考えれば、愛知県全県にモモイあるいはモモイロイが存在していた可能性もあろう。モモイ・モモイロイの使用状況についての調査

が必要なところである。

#### 4. 2 モモイ・モモイロイの誕生

さて、ピンクイの前段階にあったと想定されるモモイあるいはモモイロイが成立してくる背景も重要である。

柳田国男は、日本語の歴史の中で形容詞が乏しく不足している点を指摘すると同時に、「形容詞の必要を感ずる毎に、いつでも我々はイを付ける算段をして居た」とし、方言社会での「急場の入用」が多様な方言形容詞形を生んでいるとする<sup>(註3)</sup>。この点、方言社会の一員である愛知県下も形容詞化がある面激しいといえる<sup>(註4)</sup>。

色彩語としては、「黄色い」意のキナイ(ないしはキーナイ)の形がまず注目される。「黄色い」のように「色」を介しての形容詞化ではない点が重要である。キナイは江戸期に既にみられ、『和訓栞』には次のようにある。

き 黄は色にいふ也。参河遠江にては きないといふ。五色の口語皆いをつけていふなり

ただし『日本言語地図』によれば、キナイあるいはキーナイ、キンナイの形は愛知、静岡、岐阜、石川、四国、九州に広く分布することがわかり、愛知県下に限られるものではない(第1巻「きいろい(黄色い)」)。愛知県下では、キナイの他さらに、「真っ赤、真っ青、真っ黒、真っ白」に対してマッカイ、マッサオイ、マックロイ、マッシロイの形容詞形も持つ<sup>(註5)</sup>。

幼児語としてではあるが、モモイあるいはモモイロイという類推形を生んだ背景には、これら豊富な色彩形容詞の存在があると考えられよう。色彩に関する活発な形容詞化の創造が、モモイあるいはモモイロイを、そしてピンクイを、さらにはミドリイ以下を生み出していったものと思われる。

#### 4. 3 ピンクイ誕生の時期

ピンクイの使用率は、終止形をとりだせば、青年層66.7%、昭和20年以後23.9%、昭和20年以前6.0%であった。昭和20年以前のピンクイの使用については前述の通り、一定の使用にあると認めることはむずかしい。しかし、チャチャイを除く5語については、3.2の各語の活用形平均の数値をみる通り、昭和20年以前の世代で使用されているのも事実である。したがって、このような昭和20年以前の使用状況の中にピンクイの萌芽があったとみるか、あるいは、昭和20年以後のいずれかの世代に萌芽をみたらいいのか。

吉川・山口(1972)の報告では、モモイが1972年当時の「最近の幼児」の使用となっており、当時の高年齢層、壮年層が幼少の時代にモモイを使用していたのではないことがわかる。これにしたがえば、昭和20年以前の世代にピンクイの萌芽があったとみるのは無理であろう。この世代の使用は青年層の高い使用環境に影

響された現時点での新たな獲得とみるべきである。

したがって、昭和20年代以後のある世代においてモモイあるいはモモイロイからピンクイが生成されたことになろう。青年層の親世代(昭和20年から30年あたりの生まれ)は、モモイを幼児語として産み出した層に当たり、その意味で、この世代にピンクイの萌芽をみることに妥当性が考えられよう。しかし、この世代がピンクイそのものを産み出したかどうかの判断はむずかしいところである<sup>(註6)</sup>。

青年層においてピンクイが色彩形容詞として成立しつつあると述べたが、青年層におけるピンクイの使用状況は実は多様である。補充調査の項目である、ピンクイを「いつ頃から聞いたことがあるか」(表3)の質問には、「子供」の頃が最も高く半数近くにのぼる。また、「いつ頃から使っているか」(表4)でも、「覚えていず」を除くと、「子供」の頃がそれ以後を大きく上回る。これら使用者にとってピンクイは、子供の頃からいち早く受容、定着していたものと判断してよからう。

しかし一方、「中学生」以降にはじめて聞いたと意識しているのは合計16.3%、「中学生」以降にピンクイを使い始めたというのは合計20%強となっている。しかも高校、大学という年齢が上がってからの使用開始も各々4.5%の数数を数える。さらには、同じ青年層の言語環境にありながら、耳にしていない者が10%近く(表3)、使用した経験がないのも終止形で30%強(表1)にもなっている。

同じ愛知県の青年層において、このようにピンクイをめぐる使用の様相が多岐に渡るのは、ピンクイという語が比較的近い時期に生成され、現在浸透していく段階にあるためと考えられる。子供の頃からの使用というものも、一般生活語彙のような親世代からのことばの引き継ぎというのではなく、幼稚園、小学校という子供達の集団の場での子供から子供への獲得という面が強いと思われる。したがって、昭和20年以後のピンクイ使用23.9%の意味は、この世代にピンクイ誕生をみるのではなく、子育ての段階で現在青年層である自分の子供から、ピンクイということばを学ぶことによって獲得した、と捉える方が妥当であろう。ただしここで、ピンクイに大人世代へ影響を与えるような力が存在するのかが問題になる。これは、ピンクイが今後青年層の中で更に浸透をみせるかどうかの問題にも関連してくる。

ピンクイが示す性格・イメージは、モモイ・モモイロイとはかなり異なる。モモイには幼児語のニュアンス、方言性が認められた。それをピンクという外来語を当てることによって、新鮮さ、脱幼児語化、脱方言化が結果的にははかれたと考える。補充調査3、ピンクイの性格の捉え方によれば(表5)、「書きことば」という捉え方こそわずかだが、「標準語」が10%近くある。また、「若者語」という捉え方が6割でなされてい



「ピンクイ」の誕生

表3 「ピンクイ」を聞いたことがアリナシ

	聞いたことアリ	いつ聞いたか				
		覚えていず	子供	中学生	高校生	大学生
女性	164名 (176名中, 93.2%)	66(40.2)	75(45.7)	18(11.0)	11(6.7)	1(0.6)
男性	32名 (39名中, 82.1%)	16(50.0)	15(46.9)	0(0.0)	0(0.0)	2(6.3)
計	196名 (215名中, 91.2%)	82(41.8)	90(45.9)	18(9.2)	11(5.6)	3(1.5)

表4 「ピンクイ」の使用の開始時期

	覚えていず	子供	中学生	高校生	大学生
女性 131名	51(38.9)	47(35.9)	19(14.5)	7(5.3)	5(3.8)
男性 25名	14(56.0)	8(32.0)	1(4.0)	0(0.0)	2(8.0)
計 156名	65(41.7)	55(35.3)	20(12.8)	7(4.5)	7(4.5)

表5 ピンクイに対する捉え方

	標準語	書き言葉	若者語	流行語	方言
女性 176名	15( 8.5)	2( 1.1)	108(61.4)	33(18.8)	62(35.2)
男性 39名	5(12.8)	4(10.3)	19(48.7)	3( 7.7)	13(33.3)
計 215名	20( 9.3)	6( 2.8)	127(59.1)	36(16.7)	75(34.9)

表6 ピンクイは誰が使用しているか

	子供	中学生	高校生	大学	大人	祖父母
女性 176名	129(73.3)	133(75.6)	135(76.7)	112(63.6)	60(34.1)	27(15.3)
男性 39名	23(59.0)	21(53.8)	21(53.8)	15(38.5)	13(33.3)	12(30.8)
計 215名	152(70.7)	154(71.6)	156(72.6)	127(59.1)	73(34.0)	39(18.1)

る。確かに「方言」が35%あるが、これは、補充調査4「ピンクイの使用者の想定」(表6)より明らかな通り、祖父母が使用するとみているのは2割を切っている。これはピンクイを「方言」と捉えても、旧来の古い方言ではなく、地域社会の若者世代で使用される「新方言」的な意識が働いているものと思われる。その意味での脱方言化をピンクイは果たしている。また、表6から、子供・中学生・高校生がいずれも7割を越え、大学生でも6割近くが、ピンクイを使用すると捉えている。この点で、脱幼児語化も果たしているといえる。また、語感として外来語からの形容詞化(エロい・グロい)が帯びる俗語性もこのピンクイには感じられない。

このような脱幼児語化、脱方言化、ニュートラルな語感をもったピンクイであったからこそ、青年層への浸透にとどまらず、青年層の親世代の言語環境に影響を与えたものと思われる。また、このような性格がミドリイ以下の色彩形容詞化の流れを産み出していったものと思われる。

## 5 おわりに

愛知県における色彩形容詞化の実態を青年層を中心にみてきた。これにより、愛知県において新たな色彩

形容詞が誕生ししつつある事実を指摘できたと考える。愛知県における色彩形容詞化の段階を大きく捉えれば、次の通りとなろう。

I	II	III	IV	V
赤イ	黄ナイ	桃イ	ピンクイ	緑イ
青イ	茶色イ	桃色イ		黄緑イ
黒イ	真ッ赤イ			紫イ
白イ	真ッ青イ			茶タイ
	真ッ黒イ			オレンジイ
	真ッ白イ			橙イ

II段階に所属する語の成立の時期は各々異なっている。III段階モモイ・モモイロイの誕生する前段階という意味合いである。V段階の「ダイダイイ(橙だ)」は、今回の調査段階では省いているが、青年層から使うことがあるとの情報を得たものである。

ピンクイが活用形を揃え、活発に使用されていくことで、ミドリイ以下の語が更に使用の範囲を広げていくと予想される。さらには愛知県方言の実態が全国の色彩形容詞とクロスしていくことも想像される。それはまさしく、日本語の語彙構造の中で次の改変をもたらす可能性がある点で重要な意味を持つと考える。

日本語の色彩形容詞の歴史の中で、「赤い・白い・青い・黒い」に限られた時代から、「色」を介して創造した「黄色い・茶色い」の時代を経て、現代、名詞部に直接「い」を接続させて連鎖的に色彩形容詞を産み出すシステムを誕生させた。

なお、本稿では、ピンクイの誕生のプロセスとして、モモイ・モモイロイの存在、マッカイ（真っ赤だ）などの豊富な色彩形容詞の存在を前提として考えてきた。すなわち、愛知県の地域性をなくしてピンクイの誕生はないという立場であった。

しかし、昨今の若者語の、外来語に「い」をつけて形容詞化する傾向<sup>(注7)</sup>の延長上にピンクイの誕生をみる可能性もあろう。また、ピンクから直接に「赤ー赤い」への analogy としてピンクイを誕生させることも可能である。事実、東京の児童のことばからの指摘だと思われるが、国語教育学者が次のような話題を紹介している<sup>(注8)</sup>。

「ピンク色だ」の意で「ピンクイ」のような混種語が生まれようとしている現象などは、おびただしい数の和製英語が生み出されている現象とともに、生まれては消え去る流行語とは違って、日本語の変化の方向を示すものかもしれません。

これによれば、愛知県と離れたところで、ピンクイは誕生していることになる。それがどのようなプロセスを経て誕生したものか、その解明によっては本稿の前提は覆ることもありうる。全国的な調査をまって再考したい。

## 注

注1 陣内(1982)によれば、九州福岡市方言などでは、「一カ」語尾を全国共通語的「一イ」語尾に置き換えることにより、「下手い」(へタイ)といった新しい形容詞が実現しているとのことである。当該地域では、このようなプロセスを経たピンクイ以下の色彩形容詞を産む可能性もある。

注2 辞書にも登録がみられるナウイ(例えば『三省堂国語辞典第三版』1982年)のほかは、学生からの使用の報告による。なお、米川(1996)の若者ことばの語彙索引にみられる「ニューい」(新しい)、「キャバい」(キャバレー勤めの女性のようなさ

ま)の2語は、外来語からの形容詞化によるものと思われる。  
注3 柳田(1938)による。ほかに柳田(1934)などでも形容詞の乏しきの指摘がみられる。

注4 例えば漢語からの形容詞化と想定される語を吉川・山口(1972)から拾えば、次のようなものが挙る。「横着」からオーチャクイ(横着だ)、「下司」からゲスイ(下品だ)、「結構」からケッコイ(きれいだ)、「困苦」からコンキー(疲れてだるい)、「丈夫」からジョーブイ(丈夫だ)、「面倒」からメンドイ(面倒だ)。

注5 鏡味(1962)による。

注6 昭和20年以後の世代にピンクイの創造を求めがたい理由として、一点、青年層ではピンクイからミドリイ、オレンジイなどへ形容詞化の範囲を広げていっているのに対し、これらの語については昭和20年以前の世代と大差ない使用にあることがあげられよう。

注7 (注2)の米川(1996)に例が示されている。

注8 宮腰(1998)による(208頁)。

## 引用文献

- 谷川土清編 井上頼, 小林 増補『増補語林和訓栞』(名著刊行会 1973)  
『日本言語地図 第I巻』(国立国語研究所 大蔵省印刷局 1966)  
柳田国男(1934)；『国語史新語論』「形容詞の欠乏」の項(『定本柳田国男集第19巻』1969筑摩書房による)  
柳田国男(1938)；『形容詞の近世史』(『国語の将来』所収, 『定本柳田国男集第19巻』1969筑摩書房による)  
鏡味明克(1962)；「中部地方西部の語彙の構造—色彩の表現を中心に—」(『都大論究』2号)  
吉川利明・山口幸洋(1972)；『豊橋地方の方言』(豊橋文化協会)  
陣内正敬(1982)；「新方言『下手い』について」(『九大言語学研究室報告』3)  
米川明彦(1996)；『現代若者ことば考』(丸善)  
渡辺吉鎔(1996)；『韓国言語風景』(岩波書店)  
宮腰賢(1998)；『子どもの語彙を豊かにする指導』(国土社)

## 付記

青年層の資料を得るにあたって、本学国語教室高瀬正一先生、矢島正浩先生にご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

(平成11年9月10日受理)